

世界卓球選手権で2度のチャンピオンに輝いた 松崎キミ代さん(昭36・商経)の自伝がホームページに



昭和30年代、世界卓球選手権で2度の女子チャンピオンに輝き、専修大学の名を全世界にとどろかせた松崎キミ代さん(現姓栗本・昭36商経＝本学評議員)の自伝「卓球やらせて」「世界の舞台で～世界チャンピオンへの軌跡パート2～」がいまホームページに掲載され、話題を呼んでいる。(卓球レポート編集部既刊＝本体各1300円)同書は松崎さんの生い立ちから世界の頂点を極めるまでの軌跡を描いたもので、多くの読者に深い感銘を与えた書である。

「世界の舞台で」では、とくに故周恩来首相に試合ぶりを激賞され以後毎年、日中親善交流試合が行われるようになったことなど、歴史的秘話も挿入され興味深い。松崎さんは、結婚後、卓球教室を開いたり、全国をめぐる卓球の普及・技術指導を続けてきたが「今はもうほとんどやめているんです。でも専修大学には、後輩の森沢幸子さんが女子の監督をしているので、ときおり練習場やリーグの応援に行っています。女子は100シーズン連続1部在籍という、大記録を達成しました。今後もぜひ頑張ってもらいたい」と言っている。

※本書のホームページ <http://www.butterfly.co.jp/matsuzaki/butaide.html>

〔5月15日/ニュース専修16面〕

専大校友を訪ねて 注目集める編集プロダクション「えんぴつむすめ」代表 小松亜子さん(平13・文)

—女子学生の視点で企画・出版—



新聞、雑誌に取り上げられ、注目を集めている女子学生による編集プロダクション『えんぴつむすめ』。代表の小松亜子さんは、朝日新聞日曜・家庭面「ウチらのはやりモン」(隔週掲載)で現在、大学生の間で流行っているものをシリーズで紹介したりと、幅広い活動を展開している。

長野県出身。高校時代は松商学園高の卓球部に所属し、インターハイに出場。専大でも1年次の秋に全日本学生大会のダブルスでベスト16入りを果たしたが、大会後に足首を痛め、選手生活を断念。以後はマネージャー、主務として男女両部員の活動を支えた。

「将来もスポーツの世界に携わりたかった」とスポーツジャーナリストを目指し、2年次から就職課主催のマスコミ講座を受講。講師の高田城氏に師事し、就職活動に挑むが、女性が新聞社、雑誌社に就職する難しさを知る。そこで生来の負けん気を発揮。高田氏の助力もあって、在学中の00年8月、同じマスコミ志望の女子学生を支援しようと前身の『えんぴつ女房』を仲間と立ち上げた。

現在は、関東圏を中心に富山、三重、広島など30大学の学生約100人が加盟し、取材や情報提供を行う。「女子学生ならではの視点による企画、女子学生をターゲットとしたマーケティングの依頼が多いです。実際に活動するのは学生なので、最後まで責任感を持たせるのに苦労しますが、成長していく姿を見ると、この活動を続けて良かったと思います」。

就職支援のための勉強会も開催し、その中から大手放送局に入社を果たした専大OBもいる。

今年1月からは社会で活躍する女性、頑張る女子学生にスポットをあてたフリーペーパー「かれっじ☆まがじん」(年9回発行)を発刊。発行部数は2万部を超え、全国から反響が寄せられている。

※『エンピツむすめ』HP=<http://www.human-forest.co.jp/e-nyobo/>

[5月15日/ニュース専修16面]

自由な発想で楽しむ生け花追求 粕谷 尚弘さん（平15・経営）



今年、経営学部卒業の粕谷尚弘さんの「いけ花展」が4月8日から25日まで、生田キャンパス図書館生田分館で催された。竹や季節の花々がダイナミックに生けられ、訪れた学生たちに春の憩いを与えていた。

粕谷さんの父・明弘さんは「一葉式いけ花」の家元。その家元の下で修行を積みながら、花の素材を活かした自由な発想での創作を続け、国内はもちろん諸外国でも普及活動に勤めている粕谷さんは「楽しむ生け花を追求したい」と話している。



▲図書館生田分館での「いけ花展」

5月22日(木)から24日(土)までは、第一線で活躍中の若手作家が集う「兵庫県いけばな展」(神戸市・大丸ミュージアムKOBE)に作品を出展する。

また、いけ花を習いたい人には「出張グループ学習」にも応じる。

問い合わせは「一葉式いけ花」本部(東京・中野区)へ。TEL03-3388-0141、Eメール
=naohiro@ichiyo-ikebana-school.com

[5月15日/ニュース専修11面]